

令和7年度 第4回目黒区芸術文化振興計画改定懇話会 会議録

| | |
|------|---|
| 名称 | 令和7年度 第4回目黒区芸術文化振興計画改定懇話会 |
| 日時 | 令和7年4月21日（月）13時00分～15時30分 |
| 会場 | 目黒区役所 第16会議室 |
| 出席者 | 垣内委員、前山委員、岡田委員、奥津委員、瀬沼委員、原田委員、青木委員、橋委員、河村委員、山本委員 <事務局>文化・スポーツ部長、文化・交流課長、文化・観光係長、文化・交流課係員 |
| 欠席者 | 大野委員、中務委員 |
| 次第 | 1 開会 2 議題 (1) 団体ヒアリング結果について (2) 現行計画の実績及び評価報告（修正版）について (3) 「芸術文化に関する意識調査報告書」に対する委員意見報告について (4) 計画骨子案について (5) 将来像の考え方について 3 その他 4 閉会 |
| 配布資料 | 資料1 芸術文化に関連する団体に対するヒアリング調査 資料2-1 目黒区芸術文化振興プランの実績及び評価報告 資料2-2 実績評価一覧 資料3-1 区民意識調査に対する意見とりまとめ一覧及び対応表 資料3-2 令和6年度芸術文化に関する意識調査結果報告まとめ 資料4 めぐる芸術文化振興プラン（骨子案） 資料5 将来像の考え方について |

| 発言内容等 | |
|-------|---|
| 1 | 開会 (開会あいさつ) 部長・課長挨拶、委員の紹介、資料の説明、確認 |
| 2 | 議題 (1) 団体ヒアリング結果について <ul style="list-style-type: none"> 一般的な文化に関わる課題は大方出てきており、例として、発表の場の不足・高齢化・集客の苦労・コストの高騰などが挙げられている。 情報媒体の多様化が求められる一方で、従来型の紙媒体での発信にもまだ需要がある。 具体的には、Instagramは10～20代、X(旧Twitter)は30代、紙媒体は50代以降が多く利用している傾向にあり、各団体のホームページなども重要な情報発信源の役割をはたしていることがわかる。 障害者支援施設は、全国的にどこも似たような状態であり、日常業務に忙殺され、情報交流の場を設ける機会もなく情動的に孤立している傾向がみられる。 結果的に各現場で行われている先進的な事例を取り入れる余地もなく、web上での意見交換ができる媒体も積極的な利用はみられない。こうした状況を打開するためにも、各拠点のネットワーク化が必要であり、有力な施設を中心とした意見や情報交換の輪を作っていく必要があるのではないだろうか。 新潟の施設でも同様の取組で展示会などをやっているが、ネットワーク化の例として、埼玉県にある厚労省広域支援施設が挙げられる。そうした先進事例を持つ施設をモデルケースにすることで、業務負担の軽減につながるのではないだろうか。障害福祉課が中心とならないと難しい話なので、担当課との連携が課題になるだろう。 障害者アート活動への助成金の支給には、基本計画の作成が条件である。これは、しっかりと基本計画の策定をすればすんなり通るような審査基準のものであり、手順を踏めば助成金が支給される確率が高いにも関わらず、申請率は未だ低い。恐らく、現場のひっ迫具合によるものではないだろうか。 東京都にはアートサポートセンターという施設がある。また、障害者支援に力を入れている神奈川県、新潟県の施設に話を聞くと「障害者」だからと特別扱いする必要はないのではないかという意見が、施設経営側と障害者団体側双方から出てきている。あくまで健常者と同様に受け入れつつ、必要な配慮を障害者団体側から申し入れるという形で、実際に受け入れた劇場施設でも「事前に想像したよりも難しい話ではなかった」という知見が共有され始めている。 各自治体では、障害者の文化活動を推進するための単独の計画ではなく、文化芸術プランに組み込むことが多い。単独計画として、特殊な分野と思われるよりも充実した形で計画内に取り入れて、同様の計画とすることはノーマライゼーションの側面も持つことになる。 |
| | (2) 現行計画の実績及び評価報告(修正版)について <ul style="list-style-type: none"> レーダーチャートを見るとビジュアルがわかりやすい反面、誤解されてしまう可能性が高いため、具体的な課題を記載していると理解した。大切な事業であるが上手くいかなかった理由を分析し、障害を取り除く観点も必要である。団体ヒアリングでも課題が出てきているが、何が原因で上手くいかなかったのかについて、課題を深掘りしていくことや、実施できない箇所は手立てが必要だと考えられる。 各団体へのヒアリングの際に、各施設の機能や役割について、包括的な視点や連携が弱かったことが問題として挙げられた。例えば、目標1では、区全体では十分な量の活動を行っていたにも関わらず、未実施の施設も含めた平均評価を行うことにより、評価は低い点数にとどまったと考えている。 今後の方向性は、各施設連携を強くする、総合的かつ広い視点で評価するといった骨子案で対応している。 この評価はあくまで分析するためのツールであり、それ自体が目的ではない。評価を通じて、どこに問題があったのかを考えていくプロセスを経ることで次に生かすことができる。委員会での意見をふまえながら、実績や評価をプランに入れ込まないといけない。総合的な観点から、数字だけでなく実際の体験に基づいた記述考察していくことで、次の新しい計画につながる |

るのではないか。

- ・担当の所管があるが、施策に対して所管を割り付けた背景を聞きたい。今後の10年間の担当の決め方の仕組みを知りたい。
- ・芸文プランの継続・廃止・あるいは10年間で蓄積されたデータをもとに新規の事業を追加していくかの3択を今後各所管に調査を行う。その結果をもとに事業の幹となる部分を細かく固めていく作業を進めていきたい。
- ・やるべき事業が存在したが、実際にはできなかった事項も存在するととらえて良いか。
- ・包括的に支援することが事務局の役割ではあるが、現実問題として実行に移せなかった事案も存在する。
- ・今後の方向性がまとめられているが、他分野との連携をする仕組みについて、各施設との連携は、どこが仕組みを作り担当するのか。
- ・自治体でのアート振興事業一つをとっても、学校関係であれば教育委員会、アーティスト派遣は文化・交流課というように様々な部署が連携しなければならない。
- ・ここでの主題は目黒区の芸術文化振興、特に文化縁というテーマの継続的推進・あるいは刷新であり、今回の調査結果を踏まえ、関係する各セクションで討論などを交わし、それに合わせて他の事業に注力する必要がある。
- ・平均値を比較するという統計の仕様として、他の事業との連携など、活動の形態によって評価がたまたま低くなってしまった部分も見受けられるので、重複した部分など、実態に合わない点を整理し、それを踏まえた上でどのような連携・手当が必要かフィードバックをとりながらプランを作成したい。
- ・目黒区の芸術文化振興として大事なものは、文化縁の充実である。どのように達成していくか、連携をどのように行っていくかが重要である。文化・交流課と他課でそれぞれ担当部分を整理し、議論の上で新しいプランを立てていく。
- ・担当課については事務局に一任し、我々は文化縁推進のためどこに注力し、どんな手立てが必要かを考えたい。
- ・「文化縁」というキーワードは魅力的だが、語義がつかみにくい。資料2-1の5ページには文化縁と言葉が「文化財」に限定されているといった課題が挙げられており、今後の方向性では「文化縁」を推進方策や取組レベルで用いるのではなく、広い視点で計画的に位置付けていくことを検討している。
- ・「文化縁」とは、同じような懇話会が行われた際に、美山座長の「芸術文化の振興であるとともにまちづくり観光や交流にもつながり目黒区の魅力づくり・発信につながる理念と実践」という理念を統合した言葉であり、前回の計画では、「芸術文化を契機として、人々の間に発生するコミュニケーションと人々のつながり」が「文化縁」と定義されていた。コミュニケーションとは横の広がりであり、目黒区の特性と時代をつなぐものの両方も含んでいると考える。
- ・今回の調査においては、目標3で示される「文化縁」は文化財に意味合いが限定されているので、文化縁＝文化財というミスリードが懸念された。そのため、個別の背景では文化縁について書かず、なぜこの計画を策定するか、将来像でなぜ重要か、何が達成されるかを前段で説明していこうと思っている。
- ・目黒区の観光や教育も含めた上の文化であり、コミュニケーションが広がっていくという意味があるのか。
- ・文化芸術を振興することが目的だと考えられがちだが、地域内のみならず外とのコミュニケーションを見据えて、観光や産業につなげていくのが「文化縁」という概念だと理解している。そして、「文化縁をつくりあげる」というゴールのため、そのプランを議論していくのが今回の懇話会である。
- ・「文化縁」という言葉に関して、現状では周知が足りず、文化財にだけ関わる言葉だと認識されているのが課題である。

(3) 「芸術文化に関する意識調査報告書」に対する委員意見報告について

- ・皆様からメールで回答いただいていると認識している。

(4) 計画骨子案について・(5) 将来像の考え方について

- ・現行の案だと、目黒区ならではの希少性が薄い。地域特有の歴史的・文化的な特徴を掘り起こすような文化財をつなげる研究も文化活動の一部である。

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・目黒区を愛する気持ちは、社会生活のみならず、歴史を背景とした時間軸をテーマにして知識を広め、共有していくことでも表れるものなので、そのようなテーマでの計画も検討していただきたい。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・今後の施策案も検討中であり、新たな事業については、その点にも配慮いただきながら資料作成いただきたい。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・芸術文化は日常生活においてすぐに恩恵をもたらすものではなく、市民から見ると自分に関わりの薄いものであり、行政が優先的に扱うものなのか疑問に思われている。しかし、芸術文化事業は区民の普段の生活では無関係だと思われている芸術文化を、より日常に寄り添った「私事」だという意識を持ってもらうことが大事だと考えている。より多くの人に関心を持ってもらうために、芸術文化活動によってどのような成果をもたらされたのかを打ち出していても良いだろう。それによって、区民に芸術文化がより身近で、人生を豊かにする恩恵を与えるものだと周知することができるのではないかと。モデルケースとして小学校の国語の授業で能狂言教室を行った例がある。生徒からの反応も好印象で、何年か継続している。この様に実際に文化芸術に触れることで、楽しいと感じ、興味を持って積極的に関わろうとする気風が生まれるという事例があるので、こうした事業をより積極的に宣伝することで興味を持つ人も増えていくのではないだろうか。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・埼玉県では、障害者アート支援活動から漫画家になった人の例がある。このような文化芸事業の成果例を参考に一個人の活動を追う形で宣伝していくことも面白いのではないだろうか。 ・障害者支援活動の最先端として、障害を持つアーティストを小学校へ派遣するといった取組を行っている。このように芸術文化を通して作家と児童が話し合い、つながりをつくっていくのは双方に大きな効果をもたらすのだと思う。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育現場の立場から、「子どもが芸術文化に触れる機会の充実」は現行の施策であるが、もともと興味を持っている児童のみならず、興味が無い児童にも興味を持ってもらうためには、前述した能教室のような機会を均等に与えることが重要である。一方で標準授業日数が定められている中でそのような時間を確保していくことは課題であるが、限られた時間の中でもやる意義のあることだと思う。 ・目黒区のこの取組は非常に意欲的で、他の自治体への指標にもなり得るので、実りある会にしてゆきたい。反面、目黒学校教育プランには芸術の記載が少ないのが残念である。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・文化事業において、区役所のような行政側から働きかけを行うと、区民はどうしても「お上がやっていること」のように受け止めがちである。(当時開催中の大阪万博の例) そういったイメージ払しょくのためにも、公共がイメージする目黒のアイコン、例えば桜並木やサンマといったアイコンも活用して広く周知を図る戦略を立てたらよいのではないかと。 ・新たな将来像の標語は、言葉の入れ替えなので、語呂が良いキャッチフレーズを作っていけば良い。 ・より多くの人に区の活動が注目されることが、文化推進の活性化につながるのではないだろうか。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・第二章の末尾に提示されている「6. 区の芸術文化を取り巻く課題」の項目について、アンケート結果をもとに課題が提示されているが、解決に向けて新しい施策で対応していくのか。 ・文化縁拡充に向けた提案について、文化縁を広めることと、美術館を重点的に位置付ける2点が挙げられているが、新しいプランを考える上では、これらについてももう少し意識共有を深めるべきではないかと。 ・新たな基本目標として、3項目が提示されていることについて述べる。基本目標1の「芸術文化のまちなか展開と機会の拡充」について、まちなかに芸術文化を広げていく取組として、この部分においても「文化縁」を強調して、芸術に触れる機会、芸術文化をきっかけにつなげていく機会の場としてまちなかを位置付ければよいのではないかと。 ・基本目標2の「芸術文化活動の多様な創造参加の促進」については、「関わる」の定義を明確化して意識共有したほうが良いと思われる。将来像として、区民が芸術文化にどの程度まで参加することを目標にしているのか。個人的な意見としては、今後10年間の発展を考え、区民が自発的に芸術文化を創り出していくことがゴールであるのなら、区民が中心となって芸術文化を作り出せる環境を整えるというメッセージを前面に出していくことで、自発的に取り組んでいく意識が生まれ、より多くの人々が芸術文化に触れる機会が増えていくのではないだろうか。 |

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・子どもや子育て世代を意識とした施策を盛り込んでほしい。幼年期の情操形成の点においても、子育て期の最初に芸術文化に触れられることが望ましい。これに関連して、「子どものための音楽祭」という表現があるが、昨今の社会情勢の変化を受け、子どもへの意識、権利の意識も変わってきている。「ための」という表現は適切でなく、子どもが主体となるような言葉に変更してはどうか。また、興味を持つ子どもだけではなく、子どもたちの間の経験格差を是正していく視点が盛り込まれると良い。 ・情報発信についても、強化が必要なことがこの調査で顕在化したため、具体的な方策を以て取り組まなければならない。子育て世代からは情報が分からないと言われているが、区が行っている施策へとアクセスできるようにして欲しい。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・資料4の「区の文化資源」における表現について、芸術文化の主役は人であり、区民であるから項目として「人」を追加してほしい。それに合わせて、文化資源という表現の再考も行ってほしい。 ・鑑賞体験を望む意見が多く、実施体験を希望する意見が少ないのは残念である。アウトリーチに携わる立場として、見ているだけで理解するのではなく、自分が体験することで作品や作家、時代背景、社会的背景への理解が深まり、将来像も自分事となるだろう。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・文化縁の形成と地域の連携強化に関連して、区民が主体となった文化イベントの例として、「かかしコンクール」や地域の方が主体的に取り組む「親子のためのふれあいコンサート」、落語、日本舞踊や小学校ブラスバンドの発表の場がある「すげかりフェスティバル」がある。そうした取組を文化縁として紹介するとよい連携、波及効果になるのではないかと。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・意識調査では、文化芸術が子どもに必要だという評価が多い。自分が当事者でなくとも、なんらかの形で区の活動を評価していることが分かる。今後は「子ども」と「まちづくり」が非常に重要なキーワードであり、多様性や包摂性が重視される。また、必要な人が触れる機会が必要だが、十分に提供できない理由として経済格差がある。ルーブル美術館は入館料が高価である一方で、子どもや失業者には無料で観覧できるといった支援があり、その割合は4割にも達する。経済的な格差をどう考えるかは必要で、特に子どもの場合は体験格差にもつながる。何らかの対策を盛り込んでいくべきである。 ・全計画の実施と評価については、踏み込んで評価をしていただきたい。同様の条件で同様の事業を行っても同じ結果になりうまくゆかない可能性がある。分析結果を施策に落とし込むことが重要である。 ・文化縁には理念的なゴールがあり、いくつかのマイルストーンがあって、今回は10年後にどうなって欲しいかというものが将来像である。この言葉は、区民の意見を吸い上げた言葉としたい。区民が目黒区に思っていることがあると思われ、花開くや咲き広がるなどのイメージがあれば拾って欲しい。 ・「芸術文化に関わる」という範囲には、創造や参加だけではなく、「支援」もこの言葉の範疇に入れていただきたい。芸術文化に対する関わり方が様々あるなかで、支援者として関わっている人も必ずいることから、盛り込んでおきたい。推進体制にはクラウドファンディング等も挙げられているが、これに対しては規制緩和が重要である。 |
| <h4>4 閉会</h4> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・次回の会議日程は概ね6月ごろに書面開催を予定。素案や全体像の確認を予定。6月上旬をめに連絡予定。 ・閉会挨拶 |